

## 学校訪問旅行記（その三）

### —— 伝統を感じるイギリスの教育 ——

村 田 修 子

ユティカでの忙しかったけれども充実感の味わえた参観を終えて、ニューヨークに戻りました。すばらしく大きいけれどもボディが傷だらけで廃車寸前の車の多いことに再びあきれながら機上の人となつて、アルプスを遙か眼下に過ぎてロンドン空港につきました。

出発前「ヨーロッパで一番用心しなければならぬところですよ」と何度も聞かされていましたが、紳士の国といわれているだけに、何となくピンときませんでした。けれども一応の手続きが終つてロビーに出てみて、何だか分かるような気がしました。そこは手押車が氾濫していました。重い

荷物を持って歩かなければならない旅客への全くの親切ということなのでしょうが、余りに多すぎるために、自由に押して歩くことができないのです。チェンジ・マネーのために並ぶにしても、自分のすぐそばまで持つて行くことはできないので、車にのせたまま離れたところへ置きっぱなしになるわけです。ですから鍵をかけてあるのにあけられたとか、なくなるといふ事故もおこるのは当たり前と思われる混雑振りでした。でも私共は気心知り合った同志で交代に手続を済ませることができるので、一人ぼっちの旅でない心強さ、というものをいやというほど感じました。トラベラーズチ

ェックを握りしめて並びながら「心遣い、というようなものも、違った立場から見た場合には、必ずしもその真意通りではなくなることもあるものだなあ」と思ったとたんに、アメリカのナーサリーで見た光景を思い出してしまいました。

それは、どこでも部屋の中に水遊びができるようになった足のついた箱がありました。子どもたちはビニールの上衣を着せてもらつて、オレンジ色などの色のつけてある水を、あっちの人物に入れたり、物を浮かしたり、ビニールのホースを口にくわえて吹いてぶくぶくさせていました。面白いに違いないですが、見ていて余り衛生的

## 水遊び用の箱



ではない感じでした。どうなることかと見えていますと、子どものことですから大人の考えた吹く活動(多分これを経験させるためのものと考えられます)をするだけではなく、吸うこともやるわけです。吸って口に入ったのを出したりというわけで「ノー、ノー」と言ってみても小さい子のことですから、道具がある以上繰り返します。本当の先生は、と思ってみますと、一応止めますけれども、余り神経質に扱ってはいませんでした。大して関係のない事なのにこのようなことが何故か頭に浮かんできました。

何でも、子どもとのかかわり合いにおいて考えることが身についている自分に、ふと思い当たった一瞬でした。

無事何事もなくバスに乗り込み、日曜出勤に当たったため、ガールフレンドをつれた若い男の子の運転手によってロンドン市街は通らず、一路イギリスの中央部あたり、

ストーク・オン・トレントという訪問地へ三時間半ひた走りに走りました。

その間機上でのつかれや、地上を走っているという安堵感もあるのでしょう、ねむっては目を覚まし、そしてまたねむる、という状態でしたが、目を覚ましたときにあたりの光景を見まわすと、その度ごとに同じところを走っているように思えるほど、左右とも広々とひらけた牧場と、そこに草をはむ牛、馬、羊の群、何やら白い鳥の群、遙かに小さく見える牧舎、というわけで「一体、イギリスってこんなに大きかったかしら、日本とイギリス本土ではどっちが大きかったのかしら」と考えるほどののびやかな風景でした。

そのうち、パーミンガムの林立する煙突や煙に、川崎あたりの様子を思い出しながらハイウェイをおり、もと炭坑のあったというストーク・オン・トレントという静かな町の由緒あるらしいホテルに着きました

▲  
めずらしい煙突



た。

国旗をはためかせたこのホテルの周辺の家々は、屋根に小さくかわいらしい煙突を固めて何本ものせているのが見られないためか、私には大変珍しく、異国情緒をそそられて、すぐ写真をとって回りました。

以前石炭をたいて暖をとっていたとき、ひと部屋に一つずつある暖爐に一つずつ煙突がついていたとのことで、その数をかぞえればその家の部屋数が分かるのだそうです。

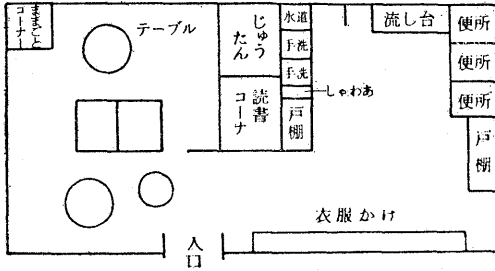
多くの家は煉瓦作りでどっしりと落ちていますし、その町の中を、すその線がふくらみをもって如何にも安定した型のミニ・クーパーという、日本では余り見掛けない車がたくさん走っています。何といっても総てに落着きがあつて気分が安まりました。古いものを大切に残し、それを誇りにしているイギリスらしさを感じました。

\* \* \*

学校訪問は、午前一校、午後一校というスケジュールなので、アメリカでの経験も加わって一同安定感を持って参加することができました。訪問について一切の世話を下さったミス・スタブスは就学前教育を担当しておられる方でしたが、非常に美しく理知的で、その上大変やさしい方でした。

まず話し合いの時、私共が「キンダーガーテン」ということばを使いますと、「イギリスではそれは使いません。ドイツ語ですから。ナーサリーという呼び方をします」といわれました。そして一九七〇年の学校制度の改革について、インファント・スクールはファースト・スクール（五歳―九歳）に変わり、ジュニア・スクールはミドル・スクール（八歳―一二歳または九歳―一三歳）になったと言われました。そして

## ▲ ナーサリー・クラスの部屋



ナーサリーにはナーサリー・スクールと、ナーサリー・クラスとある、と聞かせてくれました。

### ○ ナーサリー・スクール

三歳から五歳児で、ヘッド・ティチャーがいること、その他資格を持った先生や、ナーサリー・ナースで構成されていて、これが現在二二校あって、子どもの数は最大が一五名、最小のところが三〇名ということでした。

### ○ ナーサリー・クラス

ファースト・スクールに併設されていて、入学の資格は全くナーサリー・スクールと同じだが、ここにはヘッド・ティチャーはいない。今後はこのナーサリー・クラスの増設に政府は力を入れている。それは次のような理由によるとのことです。

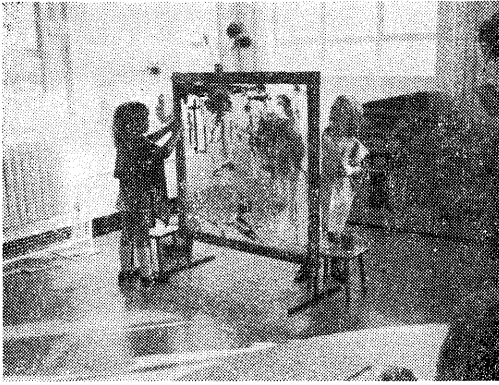
- 子どもが同じ学校に行ける。

- ヘッド・ティチャーがいないので経済的に費用が少なくてすむ。

以上の二つではどういことが行なわれているかという例を二、三あげてみます。

上図のような三歳、四歳児の部屋で、

- 小麦粉をしめらせて作った手首大の固まりを伸したり、型押しをしている。
- 好きな絵を細いマジックで書いている。
- のりをノート大の紙に一面につけ、かぼちゃの種や木の実、種、マカロニをはりつけている。
- 大版のついたたてのようになったガラスにポスターカラーで絵を書いている。
- 色のついたせっけん水をストローで吹き、あわが出たら用紙につけて模様をつけている。
- 好きな色をスポイトに吸いあげ、大きな容器の中の水にたらし、その上から画用紙をかぶせて、画用紙につく色模様を



◀ ガラスのついたてで  
大きな絵をかく子ども

楽しむ。

• こわれた時計とかラジオなどをいじったり、分解したりして遊ぶ。

次頁の図は、あるナーサリー・クラスでの配置図ですが、四歳―五歳の一三名の部屋に担任一名と、助手が一名で、  
A、カードによるリーディング。  
B、新聞紙をまるめて芯にして、二人組んでへびを作っている。

C、はさみで切ることと、ビクチュアパズルをしている。

D、絵本によるリーディング。  
E、自由に絵を書く。

以上をみると、日本の幼稚園と同じですが、人数が少ないので、それぞれの子どもをよくみて指導していることがよく分かりましたし、子どもの態度も礼儀正しく、対人関係の躰の面もよくゆき届いた感じでした。

た。

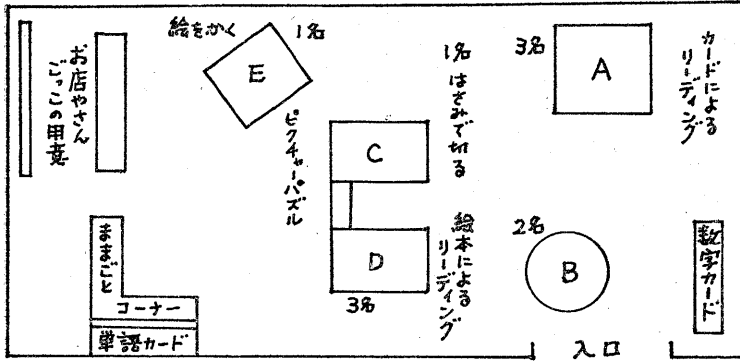
けれども、ここでも広々とした庭を使うとか、運動具を使うとかいう姿は余り見られないことはアメリカと同じで、不思議な感じがしました。子どもたちが大好きな砂遊びも、日光に当って外でするよりも部屋の中の床に砂のコーナーがあったり、砂の入った箱があって、そこでやっていました。

私が幼稚園につとめはじめた頃、お茶の水の幼稚園にも室内に砂遊びの箱があって、雨の日はよくそれが使われ、私はいつも外へこぼれた砂をはき集めていたことを何年か振りに思い出しました。

このほかにデイ・ナーサリーと呼ばれるものがあります。

○デイ・ナーサリー

これは普通の教育機関には属さないで、



社会事業の一つで、社会奉仕的な性格のもので、ストークにはこれが七施設あって、〇歳—五歳までの子どもで、次にあげる条件に当てはまる子どもたちが入っています。

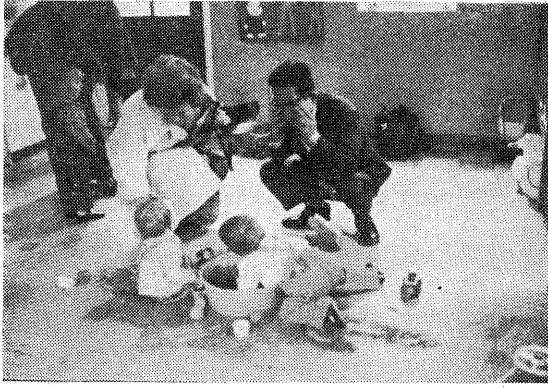
- 両親のそろっていない子
- 病気の子
- 身体的障害のある子
- 心に障害のある子

ナーサリー・スクールでは、学びとらせすることを目的としています。デイ・ナーサリーでは、世話をすることにポイントをおいています。そして保育時間も七時四十分か八時から一八時迄で、(七時三〇分—三時三〇分と一〇時—一八時の二班で交代する)職員は資格のある先生のほか、ナーサリー・ナースと、パートタイムの助手、給食関係者など、ここでも一二分の人数の人が当たっていました。世話をすることに

ポイントをおいているといっても乳児室を除いては、ナーサリー・スクール等と同じようなことをしていました。乳児室は〇歳—二歳までの六名がいて、ナースにだかれ、下着をとりかえてもらっていました。

驚いたのは、一歳二か月位の子が床に座り、置かれた入れ物の中から砂をつかみ出して、砂の中で遊んでいました。口に入れ、目をこすったりするのではないかと心配になりましたが、先生方は余り気にならならしく、長いことやらせていました。でも大人がそばにいくと首をあげてじいっと見つめたり、手を出して抱いてほしいうせすチャアをしました。通訳担当の高校の男の先生が一寸手を出すと、抱いてほしかったらしく、失礼ながら余り赤ちゃんを抱ききれない感じの先生から離れなくなりましたことなども、朝早くから親の所を離れていることを考え合わせて、ふびん

◀ ナーサリーで乳児と遊ぶ一行



に感じました。

けれども全体的に子どもたちの顔は明るくて、活動を楽しんでいるように思いました。この点は、私がばく然と抱いていたアメリカとイギリスとは少し違った感じでした。

参観はさておき、印象的だったことを少しあげてみます。

● 第二日目、私共の班を迎えにきてくれたバスはなんと、みんなが乗りたいと思っていた赤い二階バスでした。みな喚声をあげてのりこみ、一行一名はみな二階へ行き、下は運転する人だけというツアーになりました。

● あるファースト・スクール参観のとき、女の校長先生が自ら音楽を通して子どもたちの心情を育てていることが特徴という点で、大きい人たちの美しい合唱、合奏で迎えてくれました。十月半ばとい

ってもはだ寒い気候です。でも校長先生は半袖のスタイルで、首には教育のためにつくした人のもらう勲章をかけて張り切っていらっしやいました。私共が「それを見せて下さい」と頼んだところが、一たん手をかけてはずしそうになりましたが、すぐやめて「これをとるときれいにした髪が乱れますから……」とのことで身からお離しになりませんでした。

● イギリスでも毎日案内して下さったのは、ミス・スタブスという美しい方でした。毎日我々のふところ工合を考慮に入れてのことか、教育委員会などのあるユニティ・ハウスというところの食堂で昼食がとれるように計らって下さいました。その庁舎に働いている人たちにまじり、一列に並んでセルフサービスで自分の好きなものを注文してお盆にのせてゆきます。流れてゆくので、取りたいものがとれなかったり、フォークなど取りそ

こねると、ミス・スタブスは素早く足りないものを見付けて補充してくれますし、支払いのところでは、一人一人の財布の中をのぞき込み、その様子によっては、一人ずつに教えながら丁度よく硬貨をつまみ出してくれます。そこへは分かれて参観していた三班とも集まるので、そのお世話はともつかれた事でしょうとあとで話し合ったほどです。

●またある学校でやはり音楽の演奏をきかせて下さったとき、背中合わせに用意されている二台のピアノで、男女二名の大人が伴奏をしていました。その男のほうの方はこの学校の用務員さんだという説明があつて驚きましたが、同時に音楽に對する幅の広さ、生活の中にとけ込んでいる音楽というものを感じました。

それにしても兩國とも、幼児期の教育にたずさわっている方々は大部分が女の方

で、しかも美しくてやさしい上に、堂々としておられるのには感心しました。

また委員会のまとめをしている方たちや、ファースト・スクールの先生方も、就学前教育を担当している先生方に協力して教育が進められている雰囲気を感じられました。

日本でも問題となつているそのへんのつながりがある程度成功しているのは、ナリー・クラスという併設された就学前教育を重視していることの成果ではないかしらと思ひます。

\* \* \*

ストーク・オン・トレントは余り大きな都会ではないし、危険なことも聞かないので、時間があれば歩いてみることにしました。

朝早く起きて先ずホテルの周りを回り、ポスト・オフィスのあるところを探し出し、記念切手を売り出す日を見付けた

り、昔の様子が残っている煉瓦の道、壁の場所を見付けてそこで写真をとりました。

ところが、煉瓦の凹凸は微妙な、思つてもいないような色彩が出てくるのが分かつて、古きよきものを発見しました。

なれてきたとはいつても、やはりおかしいことも多くありました。

●朝やつと開いた郵便局の窓口で切手を買うとき（九ペンスの切手を十枚下さい）というのを「キューペンス テン」と言うとの係の人は分らない顔をして、

「ツーペンス？」

「ノー、キューペンス テン」

「？」

暫くしてやつと気がついて、

「オー、アイムソーリー、ナイン、ペン

ス テン」

数字は万国共通ということから、こういう錯覚も起こつて大笑いしました。



●ホテルでは今話題のスノードン卿と二晩も食堂で一緒になりました。ロングドレスのレディたちのダンスパーティなどあったりして、外国の上流社会の雰囲気もぞくことができました。静かにそして大体二時間位かかる食事については、その時間をもったいながる日本人的な人と、それを楽しむムード派とに分かれました。その食事の終りには必ずケーキが出てきます。メニューに「バナナ・ガトウ」とありました。メインの食事がすんで、例によりケーキが出てきたのを平らげたのに、あるところから声があり、

「バナナ、こねえな」

「今日はバナナ・ガトウです」

「ああ、バナナマトウか」

こういうことなど声を出して笑ったので、上流社会の人たちに、ジロリとされたひとこまもありました。

ストークでの三日間の訪問は、さらっとしているけれども暖かいふれ合いの毎日、忘れることはできません。

長い道を再びバスでロンドンに戻り市内を見学し、ウェストミンスター寺院のステンドグラスの美しさに感嘆し、有名な人の墓を踏みつけて歩かなければならないことに耐えかねて、つま先立ちし、またいで通ったことは一番印象深いことでした。一本の木、一軒の家、どこを見ても絵になる光景はうらやましい、というほかありません。

ここまではイギリス的に言うと「ゴージヤス・デイ」でした。

二日目、郊外にあるウィンザー城へ出かけるときから名物の霧にお目に掛り、霧のウィンザー城を見学してから今迄とはがらっと違った苦勞の旅が始まりました。

(つづく)

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 幼児の教育 第七十五巻第七号

七月号 © 定価二〇〇円

昭和五十一年六月二十五日印刷

昭和五十一年七月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします